

「プレス・リリース」

仏教絵画

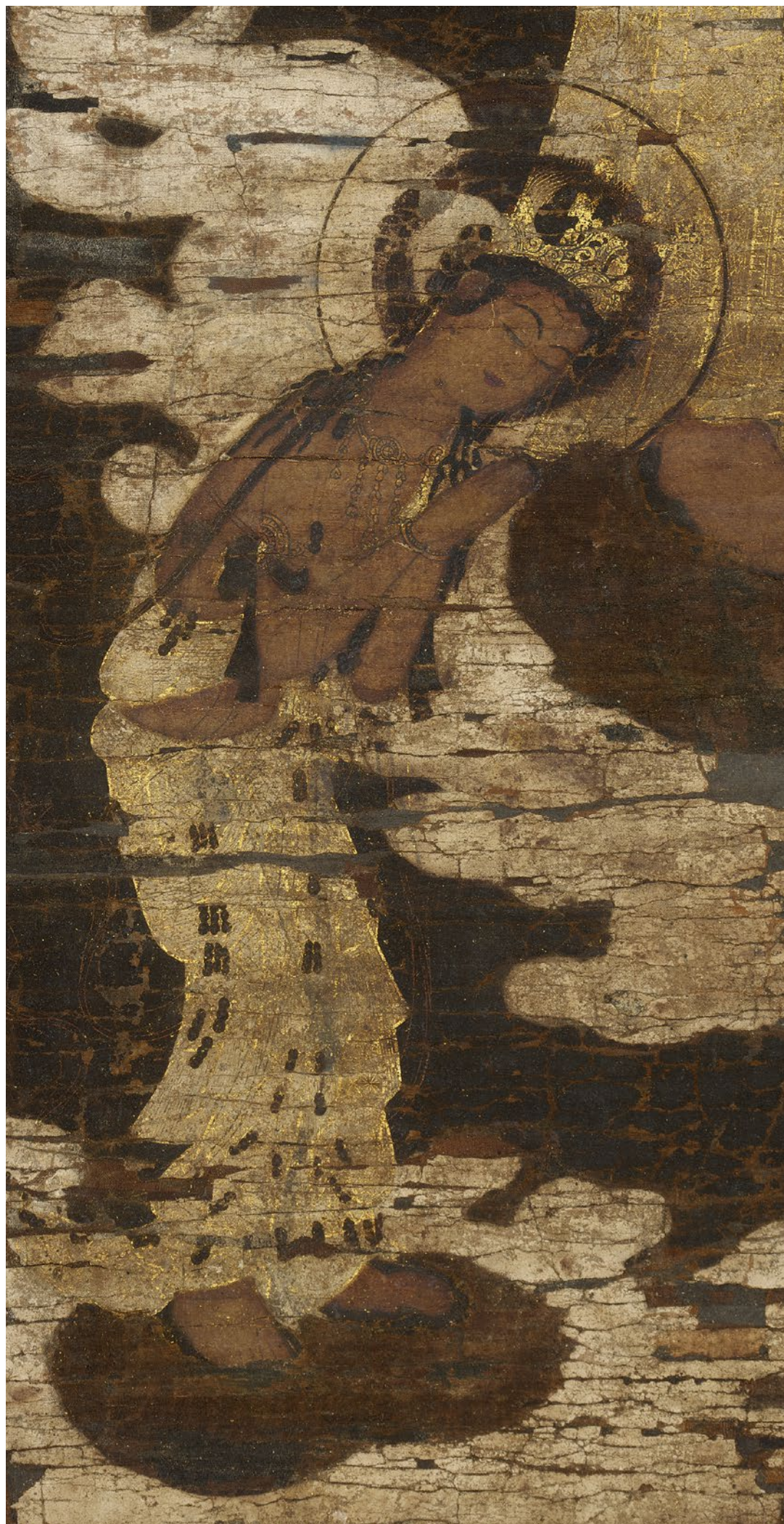
浄土信仰の絵画と柳宗悦

2022年 3月31日(木)―6月12日(日)

□月曜休館（祝日の場合は開館し、翌日休館） □10時～17時（入館は16時30分まで）
□入館料・一般1200円、大高生700円、中小生200円 □住所・東京都目黒区駒場4丁目3番33号
□電話番号・03-3467-4527 □交通・京王井の頭線駒場東大前駅西口より徒歩7分
□西館公開日（旧柳宗悦邸）・展覧会開催中の第2水曜、第2土曜、第3水曜、第3土曜（16時30分閉館、入館は16時まで）

日本民藝館

<https://www.mingeikan.or.jp/>



展覧会のみどころ

日本民藝館の創設者で、美学者としても知られる柳宗悦（1889-1961）は、造形物に美が宿る原理を仏教思想に求めました。特に浄土思想は、柳の思想形成に大きな影響を及ぼし、晩年の1955年には柳著作の最高傑作とも評される『南無阿弥陀仏』を上梓しています。本展は来迎図を始めとする浄土信仰に関連した絵画を中心に、これまでまとめて紹介されることがなかった鎌倉～室町時代の着色の仏教絵画をご覧ください、貴重な機会となります。

柳による中世の着色仏画のコレクションは、ほとんどが戦後の蒐集ですが、『南無阿弥陀仏』の刊行後に大病で左半身の自由を失ってしまった後、1958年から61年に没するまでの間に、特に集中的に集められています。そのためか、本展で取り上げる着色仏画について柳は多くを書き残していませんが、恐らくはこれらのコレクションを礎に、より一層踏み込んだ仏教美学の構築を目指して、世に問う意があったように思われてなりません。柳宗悦の最後の集中的なコレクション・仏教絵画を一堂にご覧いただく展覧会です。



柳宗悦

展覧会同時発売

『日本民藝館所蔵 仏教絵画

付・柳宗悦「種子阿弥陀三尊来迎繡画の入手の由来」』

著者：日本民藝館学芸部、柳宗悦〔B5判62 頁・税込1,000円・2022年3月31日刊行予定〕

『日本民藝館所蔵 仏教絵画 付・柳宗悦「種子阿弥陀三尊来迎繡画の入手の由来」』

柳宗悦の新出の原稿を書籍化いたしました。この原稿は未完成原稿ではありますが、亡くなる前年の1960年に、当館が所蔵する繡仏「種子阿弥陀三尊図」（画像⑤）について記した、『柳宗悦全集』（全22巻、筑摩書房、1980-92年）未掲載の論考です。

柳宗悦蒐集による館蔵の仏教絵画20点ほどを収録した図集とあわせ、1冊の本として刊行いたします。



① 阿弥陀三尊来迎図（部分） ②全図

1 幅 絹本着色 鎌倉～南北朝時代 14 世紀 88.7 × 40.2cm

観音菩薩と勢至菩薩を従えた阿弥陀如来の立像来迎図である。諸尊はいずれも踏割蓮華座に乗り、その下に描かれるたなびく飛雲によって、左上方から来迎する様が表示されている。右下の観音菩薩が腰を屈めて差し出すのは、来迎図の礼拝者が乗るための蓮台である。柳と親交のあった古美術研究家の秦秀雄の旧蔵で、剥落が多いのが惜しまれるが、阿弥陀如来、放射光が円形に広がる頭光、たなびく雲の曲線、前に屈む二菩薩が絶妙に配置され、独特のリズムを生んでいる。1960 年頃に入手した。



③ 阿弥陀如来像 伝 張思恭筆

1 幅 絹本着色 南宋～元時代 13世紀 94.5×40.5cm

踏割の蓮華座に乗る赤い着衣の阿弥陀如来を正面向きで描く本図は、南宋仏画の高い表現技術を残す作風から、中国・南宋時代末期～元時代初期の作品と推定されている。本図には柳が改装する以前に記されていた軸書「古画／立像赤釋迦尊」「稲佐山座主坊周覧所有」が付属し、これにより空海（774-835）開基の佐賀・稲佐山泰平寺十六坊の座主坊に伝わった仏画であることが分かる。1958 年頃のコレクション。



④ 春日鹿曼荼羅図 伝 住吉慶恩筆

1 幅 絹本着色 鎌倉～南北朝時代 14 世紀 108.7×38.3cm

鹿曼荼羅は法相宗擁護の神とされる春日明神が、鹿の背に坐して影向したことに由来する垂迹画である。本図は下方に飛雲に載った春日神の使いである神鹿を大きく描き、中央に鹿の鞍の上に立てられた櫛と、その上方に金色の円鏡を表す。円鏡の中には、春日社の五柱の神の本地仏五尊が描かれていた墨線が、僅かながら認められる。上部色紙形の左側は、法相宗の根本經典である『成唯識論』の一文で、春日鹿曼荼羅図の最古の作例とされる京都・陽明文庫本（鎌倉時代 13 世紀後半）の上部色紙形の賛の後半と同一である。柳は戦後間もない1948 年に本図を入手している。



⑤ 種子阿弥陀三尊図

1 幅 絹地刺繍 鎌倉～南北朝時代 14 世紀 94.5×34.6cm

円相内で蓮華座に乗る阿弥陀如来、観音菩薩、勢至菩薩の三種子が、画面の中央に三尊形式で配される。その上方に天蓋、下方に香炉と花瓶が載る三脚卓を配する図像は、刺繍による種子阿弥陀三尊図に典型的な図像であり、鎌倉時代以降に盛んに造られた、阿弥陀三尊種子を刻んだ板碑と同様の図像となっている。刺繍は糸糸を用いているが、上部色紙形の偈文と種子の黒い刺繍は毛髪を使用する髪繡で、中世の繡仏ではこの技法が多く使用されている。このたび発見された柳の未発表原稿により、亡くなる前年の1960 年に入手した作品であることが判明した。



⑤ 六字名号 伝一遍筆

1 幅 紙本墨書 鎌倉～南北朝時代 14 世紀 32.6 × 8.8cm

『南無阿弥陀仏』で法然から親鸞、一遍へと至る浄土思想を説いた柳にとって、一遍（1234-1289）の名号には格別の思いがあったのだろう、秦秀雄から一遍の名号を譲り受けた際、柳は「一遍上人の直筆名号お届け下され大きな感激でした 宿世の縁とでも申すのか不思議な仏縁に自らを疑うほどです」と秦に書き送っている。本作は時宗と呼ばれる「真の名号」に対し、一遍筆と伝わる「行の名号」の系譜にあたる名号で、名号の左右に見える木版の賦算札は、柳が新たに表装を考案した際に取り合わせたものである。1958 年以降のコレクション。

日本民藝館について

「民藝」という新しい美の概念の普及と「美の生活化」を目指す民藝運動の本拠として、思想家の柳宗悦により企画され、実業家の大原孫三郎氏をはじめ多くの賛同者の援助を得て、1936年に開設されました。本館の建物（東京都指定文化財）は、西館の石屋根長屋門に意匠を合わせたもので、設計は細部まで柳が手掛けました。所蔵品は、陶磁・染織・木漆工・絵画・金工・石工・編組など、柳の審美眼により選ばれた古今東西の諸工芸品約17,000点。その特色ある蒐集品は無心の美や健全な美を宿しており、国の内外で高い評価を受けています。



日本民藝館内観

広報用画像データのお申込みについて

右の注意事項をお読みいただき、

- | | |
|----------|--------------|
| ・御社名 | ・E-mail アドレス |
| ・ご担当者名 | ・媒体名 |
| ・ご住所 | ・掲載予定日 |
| ・連絡先電話番号 | ・発売日 |

をご記入の上、ご希望の画像を FAX または E-mail にてお申込み下さい。

〔注意事項〕

- ・画像の使用目的は、ご記入いただいた媒体上の本展紹介記事に限ります
- ・画像にはキャプションを必ず表記して下さい
- ・画像を第三者に渡したり、作品部分のトリミング、文字載せはしないで下さい
- ・使用後の画像は消去して下さい
- ・当館での確認用に、必ずゲラ刷りの段階で、原稿を左記 FAX / E-mail 宛にお送り下さい
- ・掲載いただいた場合、お手数ですが掲載紙（誌）をお送り下さい

〔FAX / E-mail 返信先〕 日本民藝館 学芸部

FAX：03-3467-4537

担当：古屋、白土

furuya@mingeikan.or.jp

shirato@mingeikan.or.jp

本展に関するお問い合わせ先：

日本民藝館 学芸部 白土(しらと) 03-3467-4527